

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業
男性同性間の HIV 感染対策とその評価に関する研究

**男性同性間における HIV/性感染症の感染予防プログラム評価に関する研究
—HIV/STI 予防啓発プログラム「Café Chat」の評価—**

研究協力者：大森佐知子、市川誠一（名古屋市立大学大学院）
内田優、中村英芳、祝雄一、川合亮、塩野徳史、原澤俊也（MASH 大阪）、辻宏幸、
山田創平（財・エイズ予防財団/MASH 大阪）、鬼塚哲郎（京都産業大学/MASH 大阪）

研究要旨

【目的】MASH 大阪は、1999 年グループレベルの HIV/STI 予防啓発プログラムとして「STD 勉強会」を開始し、開催形式等を変更しながらプログラムを運営してきた。現在の対話形式のプログラム「Café Chat」は 2005 年から実施されている。本研究では、MSM を対象としたグループレベルの HIV/STI 予防啓発プログラム「Café Chat」の有効性と課題を評価することとした。

【方法】現在のプログラム「Café Chat」を評価するにあたり、MASH 大阪での HIV/STI 予防啓発プログラムの変遷を捉るために厚生労働省エイズ対策研究事業による研究班報告書等における記述分析を行い、次いで「Café Chat」のプログラム構造を捉るために実施しているプログラム「Café Chat」の参与観察を行った。記述分析と参与観察を基に「Café Chat」の運営スタッフ、プログラム参加者及びプログラム非参加者を対象にインタビュー調査を行った。インタビュー参加者には書面による承諾を得て半構造化インタビューを実施し、逐語録を作成した。分析は、データを読み込み後、切片化し、カテゴリー生成を行った。

【結果】

1) 厚生労働省エイズ対策研究事業による研究班報告書等における記述分析

MASH 大阪が 1999 年から 2004 年までに実施したグループレベルのプログラムの変遷を整理したところ、プログラムを継続するための主な課題として、プログラム参加者の減少及びスタッフのモティベーションの低下が抽出された。

2) HIV/STI 予防啓発プログラム「Café Chat」の参与観察

参与観察の中からプログラム構造として、「Café Chat」①プログラム目標、②プログラム概要、③実施手順、④2005 年・2006 年度の成果と課題が明らかとなった。

3) 「Café Chat」の運営スタッフ、プログラム参加者及び非参加者のインタビュー調査

スタッフインタビューの語りから、「プログラム継続のしんどさ」を感じる一方で、プログラムを通じて参加者と同じ目線で「対話する楽しさ」を感じ、スタッフ自身が「自己の成長を実感」していること等が、モティベーションの維持に繋がっていることがわかった。また、プログラム評価の基準としては、「参加者数が減少しないこと」や「参加者が楽しめていること」が挙げられていた。そこから「プログラム運営の鍵となる要素」について検討した。プログラム参加者及びプログラム非参加者のインタビュー調査は逐語録の修正を終え、分析中である。

【考察】1999 年から 2001 年まで実施されていた「STD 勉強会」は、参加者数が減少したことからプログラムが見直され、反省点の一つとして、スタッフのモティベーションの低下が報告されていた。一方、「Café Chat」では、参加者数の減少は見られず、スタッフのモティベーション

が維持できていた。プログラム運営の背景として、参加者とスタッフが同じ目線で楽しむというプログラム構築が重要な要素の一つであることが示唆された。

A. 研究目的

【研究背景】

2006年のわが国のHIV/AIDSの感染状況は、HIV感染者952件及びAIDS患者406件で、いずれも過去最高の報告数であり、経年的に報告数は増加傾向にある。感染経路別内訳では、同性間の性的接触がHIV感染者63.4%、AIDS患者40.4%と最も報告が多かった。

また、報告地別では、HIV感染者では東京、関東・甲信越、近畿の順に報告数が多く、AIDS患者では、関東・甲信越、東京、近畿の順に報告数が多かった。わが国のHIV/AIDSの感染状況としては、日本国籍男性を中心に、国内での性的接触を推定感染経路とするHIV感染者、AIDS患者報告例の増加が続いている。特に男性同性間による性的接触によるHIV感染の拡大が示されており、早期検査と早期医療の機会提供を促進すると共に、この層への予防対策を人権等に配慮しつつ推進する必要がある。

わが国でのMen Who Have Sex with Men (MSM)を対象としたHIV感染の予防に関する研究は厚生労働省の疫学研究班において血清疫学調査、セイファーセックスの実態や阻害要因及び促進要因の分析などの社会疫学調査が行われてきた。

MSMへのHIV感染予防対策が脆弱であったことから、1999年度の厚生労働省エイズ対策研究事業「HIV感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究」では、大阪地域において疫学研究者、男性同性愛者のボランティア、および行政エイズ担当者の三者間の協議を重ね、MSM対象のHIV/STI感染予防に向けた啓発介入を、主に男性同性愛者で構成するゲイCBO・MASH大阪が中心になって取り組むこととなった。現在、MSMを対象としたHIV/STI感染の予防対策に関する研究は、東京、名古

屋、福岡、仙台でもゲイ・CBOやNPOが中心となって取り組んでいる。これらの地域での取り組みは当事者参加型の予防啓発として評価されるが、わが国の男性同性間の性的接触によるHIV感染者の報告は増加が続いており、有効なHIV/STI予防プログラムは未だ確立されているとは言いがたい。

諸外国のHIV感染についてみると、米国のCDC (Centers for Disease Control and Prevention) の報告によれば、2005年のHIV/AIDSと診断された成人男性のうち男性同性間の性的接触による感染は67%と最も多い状況にある。この状況に対して、米国では、MSMのHIV感染症の性的リスク要因に基づいたHIV/STI感染予防介入研究が数多く行われている。CDCは、これまでに行われてきたHIV感染予防プログラムについてメタ分析を行い、Replicating Effective Programs (REP)にてHIV予防介入プログラムの有効性分析で有効であったHIV予防プログラムをHIV/AIDS Prevention Research Synthesis (PRS) Projectに統合し、さらにHIV予防介入研究により有効性が認められたプログラムをDiffusion of Effective Behavioral Interventions (DEBI) Projectとして米国内の各属性のコミュニティに普及させている。DEBIでMSMに有効とされ米国内及び諸外国にも普及されているプログラムとしては、「Many Men, Many Voices」、「Mpowerment Project」、「Popular Opinion Leaders」、「Healthy Relationships」、「PROMISE」があげられる。

米国のこれらのプログラム構築課程に比べると、わが国においてはセイファーセックスの実態や阻害要因及び促進要因に関する研究はあるものの、その成果を集約して評価されてはいない。また各地域で、MSMを対象とし

た HIV 予防啓発がゲイ・CBO により展開されるようになり、啓発資材や啓発プログラムが開発され訴求性や認知率の向上などがみられているが、個々のプログラムの有効性については未だ十分に検証されていない状況である。

【研究目的】

本研究では、MASH 大阪が MSM を対象にグループレベルで実施している対話形式の HIV/STI 予防啓発プログラム「Café Chat」の有効性及び課題について評価することとした。

B. 研究方法

本研究では、CDC がプログラム評価の手続きとして推奨している「公衆衛生におけるプログラム評価の枠組み」(MMWR, 1999)に基づいて「Café Chat」のプログラム評価を試みることとした。この評価の枠組みは以下の 6 ステップで構成されている。

- ・ステップ 1：ステークホルダーと連携する
(当事者の参加と巻き込み)
- ・ステップ 2：プログラムを記述する
- ・ステップ 3：評価デザインを明確化する
- ・ステップ 4：信頼できるエビデンスを収集する
- ・ステップ 5：結論を正当化する
- ・ステップ 6：確実に教訓に活かし、共有する

また、枠組みの構成要素としての 30 基準が以下の 4 カテゴリーに分類され、公衆衛生のプログラム評価活動の品質を判断することとして推奨されている。

- ・基準 1：有用性、効果性
- ・基準 2：利便性、利用可能性
- ・基準 3：適正さ、妥当性
- ・基準 4：正確性

本研究では、2007 年度までにステップ 1 から 4 までを実施した。ステップ 1 としては、ステークホルダーを「Café Chat」スタッフ、MASH 大阪スタッフ及びプログラム参加者と規定し、協働関係を構築して評価を行うこと

とした。ステップ 2 としては、プログラムを記述するために、1998 年度から 2006 年度までの厚生労働省エイズ対策研究事業による研究班報告書等における記述分析を行った。ステップ 3 としては、評価デザインを明確化するため、2006 年度から「Café Chat」の参与観察を行い、さらにステップ 4 としては信頼できるエビデンスを収集するために、2007 年 3 月から 7 月までの間に、「Café Chat」の運営スタッフ、プログラム参加者及びプログラム非参加者を対象にインタビュー調査を行った。なお、本研究は、名古屋市立大学大学院看護学研究科倫理委員会承認 ID 番号：06042-2 により承認を受けて実施した。

【研究手順】

1) 厚生労働省エイズ対策研究事業による研究班報告書等における記述分析

厚生労働省エイズ対策研究事業による研究班報告書等を基に「Café Chat」が開始される以前の取り組みを整理した。すなわち 1999 年から 2004 年までに MASH 大阪が実施した HIV/STI 予防啓発プログラムの変遷を整理し、そのプログラムの課題を明確化した。なお、報告書で不明瞭な事項に関しては、MASH 大阪スタッフから聴き取った情報で補足した。

2) グループレベルの HIV/STI 予防啓発プログラム「Café Chat」の参与観察

2006 年 4 月、「Café Chat」のプログラム構造の把握を行うことを目的とした参与観察の了承を MASH 大阪から得た。「Café Chat」はプログラムの特性上、プログラムスペース内は“men only”である。このため、「Café Chat」が行われている同じ空間で参加者やスタッフの動きが見える位置で観察を行った。

また、参与観察に加え「Café Chat」の事前・事後のミーティングにも同席している。事前ミーティングでは、テーマ設定や資材の発案などプログラム実施時以外の場面でのプログラム運営状況の把握を行った。また、事後ミーティングでは、プログラム実施時において

参与観察のみでは十分把握できなかった部分やプログラム参加者の特徴やプログラムの進行状況などについて振り返りを行いながら観察では補足不可能な情報を把握するよう努めた。その際、スタッフがプログラム実施時に抱えていた問題点があった場合は、参与観察とミーティング内容から把握できた問題点の整理を一緒にを行い、適宜スタッフにフィードバックを行った。

3) 「Café Chat」の運営スタッフ、プログラム参加者及びプログラム非参加者を対象としたインタビュー調査

前述の1)及び2)の結果を踏まえて、2005年から2007年3月までの間に実施されてきた「Café Chat」の成果と今後の課題について、プログラムスタッフ、プログラム参加者及びプログラム非参加者の三者間でのデータを比較し、プログラム「Café Chat」の3者間での意味づけについて分析を行うことを目的としてインタビュー調査を実施した。

3-1) スタッフインタビュー調査

2005年から2007年3月までに「Café Chat」に従事したスタッフ7名を対象に、2007年3月に1名につき約1時間の半構造化インタビューを実施した。毎回インタビューアイの許可を取り、許可が得られた場合に限りインタビュー内容をICレコーダーで録音した。その後、逐語録を作成し、データの読み込みを繰り返し行い、データの切片化を行い、カテゴリ生成を行った。

主な質問項目としては、①Café Chatスタッフとしての自分について、②Café Chatスタッフから見た参加者について、③Café Chat運営の全体についてインタビューを行った。

3-2) プログラム参加者インタビュー調査

2005年から2007年3月までに「Café Chat」に参加した男性18名を対象に、半構造化インタビュー（約45分／名）を2007年5月から7月に実施した。

主な質問項目としては、①基本属性、②「Café Chat」について（認知や参加理由など）、③distaの他のプログラムについてプログラム参加者にインタビューを行った。

3-3) プログラム非参加者インタビュー調査

2007年7月までにdistaを利用しているが「Café Chat」に参加していない男性10名を対象に、半構造化インタビュー（約45分／名）を2007年6月から8月に実施した。

主な質問項目としては、①基本属性、②「Café Chat」について（認知や非参加理由など）、③distaの他のプログラムについてプログラム非参加者にインタビューを行った。

なお、スタッフインタビューについては、スタッフがプログラム運営上で経験した成果と課題を明確化し、プログラム運営において鍵となる要素を検討し、今後のプログラム運営及び評価のための基礎資料とするための分析を行った。本報告ではその分析結果について述べる。

プログラム参加者及びプログラム非参加者インタビュー調査に関しては、逐語録の修正を終え、分析中である。

C. 研究結果

1) 厚生労働省エイズ対策研究事業による

研究班報告書等における記述分析

MASH大阪のスタッフ自身がSTD予防の知識を身につけることを目的とした勉強会が1999年からスタートした。その後、ゲイコミュニティに集まるゲイ・バイセクシュアル男性を対象にし、医師を交えたSTDの知識や予防方法を学ぶ講義形式の「STD勉強会」となった。STDに関する医学的知識のみでなく、実践的なHIV感染リスクを下げる方法などについてゲイCBOスタッフと対象者との意見交換を毎月1回堂山地区のクラブを会場に行っていた。しかし、2001年以降にプログラム参加者が減少し、それに伴いプログラムスタッフ自身のモティベーションが低下し、プログ

ラムを一旦中止することとなった。

その後、対象者のニーズに即していないのではないかなどのスタッフの疑問から、対象者が受動的に参加できる方法と能動的に参加できる方法を用意し、いずれかを選択できる「Café Prevent」(5回完結)と「STI workshop」(3回完結)の2つのプログラムを2002年に試行した。

2003年はMASH大阪がHIV予防のためのコミュニティースペースdistaをオープンしたことに伴い、STIに関するプログラムを恒常に提供することが必要となり、対象者をSafer Sexに無関心な層に新たに設定し、STIの情報提供を中心とした勉強会「Intro.」が開始された。様々な広報媒体を利用して広報を行ったものの、参加者は少なく“勉強会”という形式自体にニーズがないのではないかとのスタッフの判断から、一旦、プログラムを終了した。

2004年からはGay Lifeをテーマとして、そこで話されるセックスの話の中にセイファーセックスの情報を盛り込む新たな形式でプログラムが運営されることとなった。しかし、Gay Lifeの話の中にセイファーセックスの話を盛り込む方法は、スタッフ自体多くの知識やファシリテーション能力が必要となることから、プログラム構成を変更することとなった(図1)。

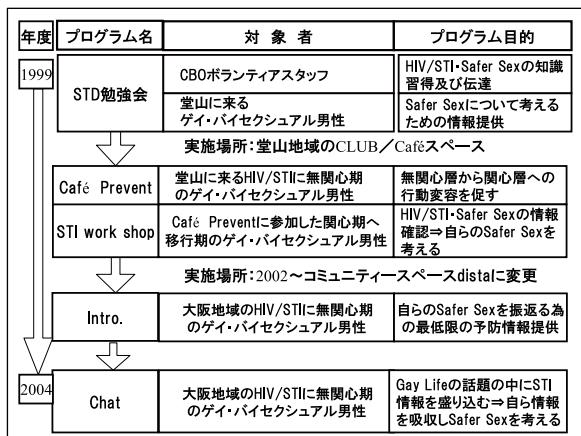


図1. グループレベルのHIV/性感染症プログラムの変遷(1999-2004年)

1999年から2004年までのグループレベルのプログラムの変遷を整理する中で、実施されていたプログラムの課題が抽出された。プログラムを継続するための主な課題としては、プログラム参加者の減少及びスタッフのモティベーションの低下であった(図2)。

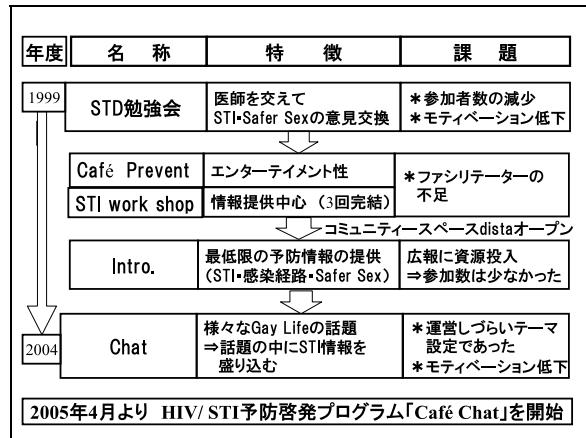


図2. 1999-2004年までのHIV/STI予防啓発プログラムの課題

2) グループレベルのHIV/STI予防啓発プログラム「Café Chat」の参与観察

参与観察の中からプログラム構造として、「Café Chat」①プログラム目標、②プログラム概要、③実施手順、④2005年、2006年度の成果と課題が以下のように明らかとなった。

①プログラム目標

プログラム内で対話するテーマとして、a. セックスに関するテーマ、b. STIに関するテーマを設定している。プログラムに参加し、セックスに関して事前に設定されたテーマにそって対話をを行うことで、テーマを通して自らのセックスを含めたライフスタイルを振返るきっかけ作りをしている。

そして、グループ内で対話を進めることにより、セックスを日常の一部として捉え、また、自らの言葉で意見や情報交換することにより、多様な性や生活のありかたを認容することができることを第一段階と設定し、プログラムに参加することが、STIについて話をする機会となる。

そして、プログラム参加を重ねたり、プログラム中に取り上げたテーマについて身近な友人などと話すことにより、STI に関する対話の機会が増すことで STI について身近になっていくことを第二段階と設定している。

最終目標としては、参加者自らが STI について身近な事象であるという思考の土壤が形成され、STI の予防や共生の意識が浸透していくこととしている（図 3）。

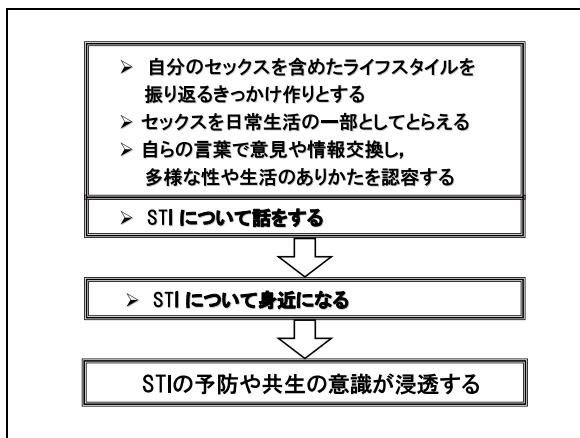


図 3. プログラム目標

②プログラム概要

2005 年 4 月から毎月第 2 土曜日の 20 時から 22 時までコミュニティースペース dista 内のカフェイベントの一環として、同スペースの一角でプログラムを実施している（図 4）。



図 4. 「Café Chat」の実施風景

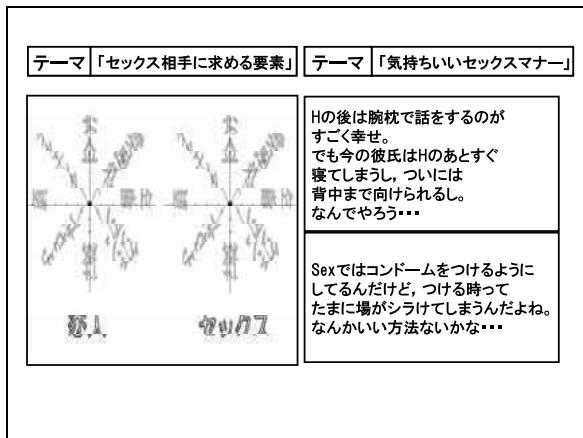
プログラムの対象者は、ゲイコミュニティ等からの情報に疎遠な層及びゲイコミュニティに関わる経験や期間が浅い層としている。しかし、実際には設定した対象者のみに絞った参加募集の形態をとらず、「men only」としている。

プログラムの場の設定としては、お茶などを飲みながらリラックスして話せる雰囲気で、参加者同士が共通のテーマに沿って対話をを行い、守秘性やノンジャッジメンタルな対話が担保されるようにグランドルールを設けている（図 5）。

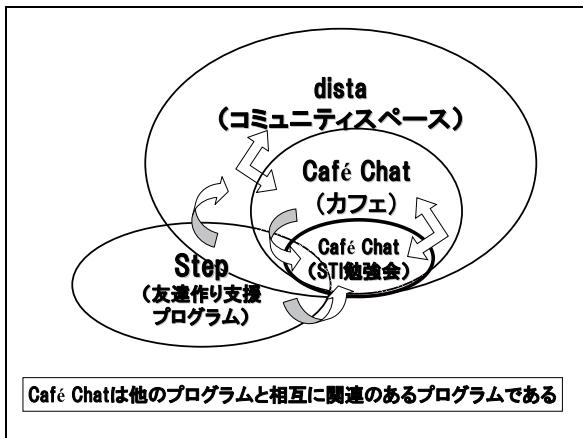
期間	2005.4～現在（毎月第2土曜日 20-22時）
対象	ゲイコミュニティ等からの情報が疎遠な層 ゲイコミュニティに関わる期間や経験の浅い層
参加数	2005.4-2006.3 94名/12回 2006.4-2007.3 157名/12回
場の設定	カフェイベントの一環としてリラックスした雰囲気作り
テーマ設定	Sexに関するテーマから STIに関するテーマへ移行 独自に作成した資材を使用
形式	ノンジャッジメンタルな対話型
スタッフ	ファシリテーター 1名（進行役） サポートスタッフ 2-3名（質問提示役、状況観察役、参加者対応役）
広報	コミュニティーパーティーSal+、ポスター、口コミ、ゲイ雑誌など
共催	大阪府・厚生労働省エイズ対策研究事業

図 5. プログラムの概要

「Café Chat」スタッフは、企画や資材作成及びプログラム実施までの全体のコーディネートを行っている。テーマに応じた独自の資材は、参加者間で各自が対話に共通性や差異を知るきっかけとなるとともに、グループ内でのアイスブレイクの役割を果たしている。また資材は、ファシリテーターのファシリテーション自体を補足する役割を果たし、ファシリテーターと参加者間の対話が促進され、Sexに関するテーマから STIに関するテーマへ話題の移行をしやすくしている（図 6）。



「Café Chat」参加者数は、2005年4月から2006年3月まで94名/12回、2006年4月から2007年3月まで157名/12回と年々参加者は増加している。プログラム中は出入り自由かつ途中参加も可能である。そのため、dista にふらりと立ち寄った来場者にもプログラムの様子が見えるため、プログラム参加を意図していなかった来場者もクライアントとなることがある。また、友達支援プログラム「Step」の参加をきっかけに「Café Chat」を知り、参加する20歳代が多く見られることが特徴的である（図7）。



③プログラム実施手順

「Café Chat」のプログラムは Sex Chat と STI Chat の2部構成になっている。

実施手順は次のように展開されている。

まず、プログラムを開始するにあたり、グランドルールの説明を行っている。その場で話された発言については、お互いノンジェンジメンタルな対応に配慮し、場が保証できる範囲等について参加者と共有した上で対話が進められていく。

次に、Sex Chat を約 90 分行っている。ここでは、アイスブレイクを兼ねたセックストークを中心として資料を用いた対話をしている。

その後、STI Chat を約 15 分行っている。ここでは、STI の症状、検査情報、セイファーセックス等について資料を用いて対話をしている。

プログラム終了後は、時折参加者からの STI に関する質問や個別相談等があり、プログラムスタッフが対応している。

プログラムに関するミーティングについては、プログラム開始前に実施手順の確認等を行い、プログラム終了後にはプログラム中で生じた課題などについて検討している（図8）。

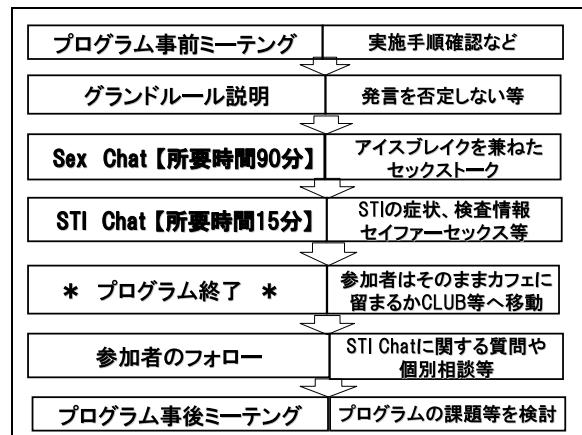


図 8. 「Café Chat」のプログラム実施手順

④2005、2006年度の成果と課題

2005年、2006年の「Café Chat」の成果と課題については、参与観察及びプログラムスタッフからの聞き取りから整理した。

成果としては、カフェで友人とお茶を飲みながら対話をするようにリラックスした雰囲気作りを行えたことや、Sexを中心としたテ

一マから STI に関するテーマへ移行する形式でグループの話題をプログラムスタッフがファシリテートできしたこと、プログラムスタッフ自身がプログラム運営を楽しんで行えたこと、参加者数が毎回 10 名以上得られた事などがあげられた。

また課題としては、参加者数が 10 名以上であると対話形式でのファシリテーションを行はずらいことや、性交経験の浅い層へのテーマ設定をどのように行うか、また、来場者数以外のプログラムの効果を評価できる指標を検討する必要があることなどがあげられた(図 9)。

成 果		課 題
開催形式 参加者数	* Caféイベントの一環 ⇒ Café来客者が Chat に参加	* 参加者数 10 名以上 ⇒ 全体での対話は困難
テーマ設定	* Sexについて話すことで、 STI の話へ移行しやすかった	* 性交経験の浅い層への テーマ設定
スタッフ	* 参加者中から運営スタッフ 希望者が現れた * 自らが楽しんで継続できた	* ボランティアでの長期継続 が困難(異動など) * ファシリテーション能力は スタッフの技量に依存
資材	* 多様なテーマ設定が可能 * 参加者の意見が引き出し やすくなった	* 今後に向けての資材開発
評価	* 平均 10 名以上の参加が 得られた	* 来場者数以外の評価指標 を検討する必要性あり

図 9. 2005 年、2006 年度の成果と課題

3) 「Café Chat」の運営スタッフ、プログラム参加者及びプログラム非参加者を対象としたインタビュー調査

3-1) 「Café Chat」スタッフインタビュー調査

スタッフインタビュー調査における分析は、主に 1) スタッフのモティベーションが維持しやすい要因、2) スタッフのモティベーションが低下しやすい要因について、それぞれ①スタッフから見た参加者について②スタッフ自身について③スタッフがプログラム運営について考えていたことについて鍵となる要素を検討した。

注：カテゴリーは、「太字」で示している。また、スタッフの語りは「・斜文字」で示し

ており、語りの中での補足は（ ）で表記する。

3-1-①) スタッフのモティベーションが維持しやすい要因 (参加者について)

参加者数が維持できている

- ・参加者数の増加・参加者がコンスタントに集まる
- ・リピーターがいる

参加者のプログラムへの反応は良好である

- ・参加者の反響(面白そう)
- ・途中退場の参加者が少なくなった
- ・自分のセックス観について話せている

プログラム参加後の態度への影響

- ・参加者が(プログラム中以外で) dista で Chat (セックスや STI に関して対話)していること
- ・参加者がセックスの話への抵抗感がなくなり日常的に性の話ができる人が増えてきた
- ・「土曜日は dista へ行く」という文化が形成されている
- ・step やアウトリーチ(他の MASH 大阪のプログラム)も参加している
- ・(Café) Chat だけしか (dista で) 見かけない人もいる

3-1-②) スタッフのモティベーションが維持しやすい要因 (スタッフ自身について)

スタッフのプログラム運営上で配慮ができた

- ・参加者の視点を忘れない
- ・参加者もスタッフも楽しめるプログラム作り

- ・プログラム中でも、ミーティングでも人の意見を否定せず聞く

スタッフ自身がプログラムを楽しめた

- ・スタッフ・参加者相互の対話が楽しい

スタッフ自身の学び・成長の促進

- ・プログラム作りを学べた
- ・プログラム企画・実施により⇒新しい思考の受容が可能となり、
- ・他者の意見を聞く受け皿が広がり、取捨選択が可能となった。
- ・自分のセックスやSTIの認識の変化があった。
- ・SEXやSTIが自分の生活に繋がっていることが実感できた
- ・プログラムを通じて今の自分が形成された⇒自分自身の成長を実感できた
- ・自分の参加意義を見出せた

スタッフ間の信頼関係の形成

- ・気心の知れたメンバー構成
- ・集まればきちんと話ができる

3-1-③) スタッフのモティベーションが維持しやすい要因（プログラム運営について）

テーマ・資材の醸成

- ・テーマがあるので話題が限定され話が深められていく
- ・SEX Chatのテーマや資材の工夫が凝らされている
- ・（プログラムスタッフの）見方・専門性の違いでいいものが出来ている

状況や場面に応じた場の形成

- ・しゃべりやすい雰囲気がセッティングされている
- ・参加人数が増加しても対応できている

ミーティング体制の形成

- ・体制が整ってきた（ミーティング等）
- ・プログラム中でも、ミーティングでも人の意見を否定せず聞く

3-2-①) スタッフのモティベーションが低下しやすい要因（参加者について）

想定していた対象者が来ているかは不明

- ・都合と時間が合えば参加
- ・ゲイコミュニティにアクセスのない人はあまり来ていない
- ・おとなしい人が多い
- ・セックスはしているが頻度は高くなさそう
- ・参加者がSTIについてどう思っているかわからない

想定した対象者が参加しやすいプログラム構成の必要性

- ・STIをChat（対話）するときは参加者にも行為などの知識がないと話せない
- ・勉強の意味合いが強い
- ・教える教えられる関係

3-2-②) スタッフのモティベーションが低下しやすい要因（スタッフ自身について）

スタッフ自身のプログラム継続に対する心境

- ・プログラムを続けることのしんどさ
- ・スタッフの持っているスキルの継承へのあせり
- ・プログラムをニーズに照らし合わせる大変さ

スタッフのサポートの必要性

- ・MASHのサポートがなかった

- ・ちょっとずつ前進はしているがこのままだと不完全燃焼しないか心配
- ・個々の能力を十分發揮でき、運営に携わる意味を見出せるような（プログラムスタッフへの）コーディネートができれば・・・

スタッフ間のプログラムの方向性の相違

に対する危惧

- ・（プログラムスタッフの）人数が多い分意見がまとまりにくい
- ・スタッフ間の意見のバランスのとり方
- ・*(Café Chat)* 自体をどうしていくか、根本となるものが必要
- ・個々の重点の置く側面や方向性の相違があるが、意見が交差する点があるはず

3-2-③) スタッフのモティベーションが低下しやすい要因（プログラム運営について）

プログラム実施時の空間作りの困難さ

- ・参加者の人数の増加に伴う騒がしさ

STI CHAT のプログラム構成の困難さ

- ・STI で *Chat*（対話）は成立していない
- ・*STI (Chat)*までくるとスタッフ/参加者相互にバテる
- ・レクチャー的なプログラムへ振り戻されていることへの危惧

プログラムの内容構成に対する課題

- ・資材作成と使用方法の整理が必要
- ・自分が話すことが楽しいと気づける工夫が必要
- ・1回のプログラムに内容を盛り込み過ぎる

スタッフミーティング等を運営する困難さ

- ・疲弊せずプログラムを継続できる状況作り
- ・今まで (*Café Chat* のスタッフ構成が変更以降) のプログラム運営との違い（方法、メンバー構成、ミーティング等）

プログラム評価指標が不在

- ・何で参加者が楽しそうなのかが分からない

以上のスタッフの語りを基に、「プログラム運営の鍵となる要素」を 6 要素抽出した。

【プログラム運営の鍵となる要素】

- 1) セキュアリティ等への不安を配慮できる場（空間）と人材の設定
- 2) 対象者とスタッフの対話が促進できるテーマ・資材作成・整理
- 3) スタッフと参加者が同じ目線で楽しめるプログラム構築
- 4) プログラムスタッフが各自の役割を認識できる体制づくり
- 5) プログラムスタッフの人材確保とサポート体制の構築
- 6) スタッフと研究者の協働による参加型プログラム評価体制

D. 考察

1999 年から 2001 年までの間に実施された「STD 勉強会」では、参加者数の減少により、プログラムの見直しが行われ、反省点の 1 つとして、スタッフのモティベーションの低下が報告されていた。

一方「*Café Chat*」では、参加者数の減少は見られず、また、スタッフのモティベーション低下も確認されなかったことから、本プログラムは「公衆衛生におけるプログラム評価活動の基準」をのうち、有用性及び利用可能

性があることが参与観察及びスタッフインタビューの分析から推察されるが、妥当性及び正確性においてはスタッフインタビューだけでは評価できないため、参加者及び非参加者へのインタビューを分析した結果を総合して、最終的に HIV/STI プログラム「Café Chat」の評価とする予定である。

スタッフインタビューから抽出した「プログラム運営の鍵となる要素」の各要素については、以下のことが考察された。考察部分は、「・」で示すこととした。

1. セクシュアリティ等への不安を配慮できる場（空間）と人材の設定

- ・プログラム参加後でも、その場に留まることで、他の参加者とプログラムの内容について話が深められる可能性がある。
- ・プログラム参加者及び参加者のネットワーク内で、プログラムでとりあげたテーマについて話されることで、dista の利用方法や存在意義についての認知形成が行える可能性がある。

2. 対象者とスタッフの対話が促進できる テーマ・資材作成・整理

- ・資材の活用により対話が促進されていることから、配布型の資材の場合、参加者のネットワークを通じて不参加者への Safer Sex について話す潤滑剤となる可能性が考えられる。

3. 参加者とスタッフが同じ目線で楽しめる プログラム構築

- ・当事者性の視点を生かし、参加者・スタッフともに楽しめ成長でき、プログラム形成が可能となり、プログラムに参加することで相互作用によりセクシャルヘルスへの意識の向上へ繋がる可能性があることが示唆された。

4. プログラムスタッフが各自の役割を認識 できる体制づくり

- ・例えば今後、ロジックモデルをベースとしたプログラム構築を行うことで、対象の明確化、プログラム目的とプログラム目標に応じたプログラムが形成される可能性がある。

- ・ステークホルダーであるスタッフ自身がプロセス評価及びアウトカム評価を行うことが可能となる。また、プログラムの軌道修正が必要な場合も、スタッフ自身が現状を客観的に確認することができ、結果的にモティベーション維持にも繋がることが考えられる。

5. プログラムスタッフの人材確保とサポート体制の構築

- ・よりよいプログラムを行うには、適切な人材またはそれを育成するためのサポートが必要となる。また、スタッフのモティベーション低下を防止するためにも、Café Chat のスタッフ間内のみでなく、MASH 大阪の他のプログラムスタッフとも相互のプログラムの関係性を確認し、互いにサポートできる体制作りが必要と考えられる。

6. スタッフと研究者の協働による参加型

プログラム評価体制

- ・プログラムスタッフ及び MASH 大阪スタッフ、参加者、研究者などが協働で評価を行うことで、現場の状況から乖離しない評価を行うことが可能となった。

E. 結語

「公衆衛生におけるプログラム評価の枠組み」を基に、1) 厚生労働省エイズ対策研究事業による研究班報告書等における記述分析、2) グループレベルの HIV/STI 予防啓発プログラム「Café Chat」の参与観察、3) 「Café Chat」の運営スタッフ、プログラム参加者及びプログラム非参加者を対象としたインタビュー調査を行った。現時点では、すべての分析が終了していないため、総合的な評価を行うこと

はできないが、これまでに明らかにされてこなかつた。

MASH 大阪が試行してきた HIV/STI 予防啓発プログラムの変遷を辿り、現在実施している「Café Chat」までのプログラムの特性を把握すると共に、プログラム先行型で啓発介入を行わざるをえなかつた背景が再認識された。今後は、「Café Chat」スタッフ、プログラム参加者及びプログラム非参加者の三者間の分析をさらに進め、総合的な「Café Chat」の評価を明らかにするとともに、評価結果をもとに、再度プログラム対象者の特定とニーズに基づいたプログラム構築が行えるよう、ロジックモデルの作成を行い、プロセス評価及びアウトカム評価ができる評価体制作りが必要となると考えられる。

F. 発表論文等

(国内学会発表)

大森佐知子（名古屋市立大学大学院）、内田優、中村英芳、祝雄一、川合亮、塩野徳史、原澤俊也、町登志雄、鍵田いずみ、(MASH 大阪)、辻宏幸、山田創平、後藤大輔（財団法人エイズ予防財団・MASH 大阪）、鬼塚哲郎（京都産業大学・MASH 大阪）： MSM を対象としたグループレベルの HIV/STI 予防啓発プログラムの評価に関する研究-プログラムスタッフへのインタビュー調査から-, 第 21 回日本エイズ学会学術集会, 2007 年 11 月 28 日, 広島